

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 桂 元嗣

本論文は、ドイツ語による近代小説において重要な位置を占めている、オーストリアの作家ローベルト・ムージル (Robert Musil, 1880-1942) の代表作と目される未完の長編小説『特性のない男』(1930年代前半に第3巻 38章までが公刊されたが、それ以降は遺稿として残された) をとりあげて、そのさまざまな稿態を整理し、分析しつつ、なかんずく登場人物の一人であるモースブルッガーを中心に、この作品の構造を論じたものである。

『特性のない男』は、すでに1906年ごろに最初の構想が書きとめられているが、主として執筆されたのは、ようやく1920年代になってからのことである。ここにいたるまでに、さまざまな表題が考えられ、主人公の名前も変転した。筆者は、いくつものテキストを詳細に読み込みながら、モースブルッガーが一貫して登場人物として残されていることに着目して、これを軸としながら、この作品の生成過程を解明しているが、この試みは、十分、成功しているといえよう。他方で、快樂殺人犯として精神病院に収容されるモースブルッガーの法的な「責任能力」のテーマは、さまざまなヴァリエーションをくりひろげつつも、ほぼすべてのテキストに受け継がれており、筆者は、そこから世紀転換期のヨーロッパにおける「新しい人間」をめぐる言説との関連をみいだすことによって、この小説が身をおいている思想史的な文脈を明るみに出していく。なかんずく日常的な言語に先立つ根源的な具象性の主題にかかわりながら、ムージルも知悉していたエルンスト・クレッチュマーの精神病理学やマルティン・ブーバーの神秘思想に関する著書をも参看して、この間の消息を明らかにする論述は、きわめて説得力をもつものである。こうしたさまざまな思想を統合しつつ、この小説は成り立っているともいえようが、それは単なる非合理主義への傾斜に帰結することなく、いわゆる「エッセイスム」をその方法とする、ムージルの「超合理主義」に立脚することによってこそ可能となる。かくしてその先に、モースブルッガーの形姿を契機にして、「人類が全体として見る夢」が構想されることになる。

このムージルの大作を論じた研究は、日本においても枚挙にいとまがないが、筆者は、いたずらに細部に拘泥して詳述することなく、一方において作品の構造分析に、他方において思想史的な文脈に、それぞれ意をもちつつ、作品を展開させている動因をよく明示している。なかんずくモースブルッガーに焦点をあてて論じた文献は、ドイツ語圏においても例をみない。

本論文は、明快な構成を意図するあまりに、他の重要な主題が言及されずに終わっている観もあり、その点はいささか憾みなしとしないが、参考文献を博搜しつつ、首尾一貫した論理を構成しえた力量は、十分に評価されるべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。